

令和7年度第1回千葉県県民活動推進懇談会 開催結果概要

1 日 時

令和7年7月22日（火）午前9時30分から正午まで

2 場 所

千葉県庁本庁舎2階千葉県県民活動情報オフィス内ミーティングスペース

3 出席者

鎌田委員、関谷委員、牧野委員、山本委員、高橋委員、伊藤委員、橋爪委員

※以上7名

事務局6名（課長、副課長、県民活動推進班長、県民活動推進コーディネーター、担当2名）

4 議事の概要

議事（1）千葉県県民活動推進計画令和6年度実施事業結果について

議事（2）千葉県県民活動推進計画令和7年度実施事業について

○鎌田座長

最初に、本日の懇談会の開催結果概要については、事務局で取りまとめた後、各委員に確認いただいた上で千葉県ホームページに掲載しますので、あらかじめ御了承ください。

それでは、議題1「千葉県県民活動推進計画令和6年度実施事業結果」と議題2「千葉県県民活動推進計画令和7年度実施事業」の議論を一緒に進めてまいりますので、各議題について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

議題1「千葉県県民活動推進計画令和6年度実施事業結果」、議題2「千葉県県民活動推進計画令和7年度実施事業」について併せて説明させていただきます。

資料1「千葉県県民活動推進に関する年次報告書（令和6年度）」を御覧ください。こちらの年次報告書につきましては、令和5年度から7年度を計画期間とする現千葉県県民活動推進計画の中間年度である令和6年度に推進してきた施策の実施状況とその成果について、作成したものとなります。本書により、千葉県県民活動推進計画の実施状況と成果を皆様と共有し、今後の取組の更なる発展につなげていきたいと考えています。

まず、年次報告書の3ページから14ページにつきましては、「千葉県県民活動推進計画の概要」となります。新しく就任された委員の方もいらっしゃいますので、実施事業結果の説明の前に、現計画の概要

について簡単に御説明いたします。

年次報告書の３ページを御覧ください。「１ 計画策定の基本的な考え方」における計画策定の趣旨ですが、県民一人ひとりが地域課題に対し、主体的・自発的に取り組むことが重要であること、また多様な主体が連携・協働して取り組むことが重要であるといった基本的な考えのもと、県民が自発的に地域に存在する様々な課題の解決を図り、地域社会をより豊かにしていこうとする社会貢献活動である県民活動の更なる促進を図り、多様な主体が連携・協働して様々な地域課題を解決するため、本計画を策定いたしました。

本計画は、千葉県総合計画を踏まえるとともに、前計画の基本的な考え方を継承し、県民活動の推進のために県として取り組むべき方向性を定めたものになります。

続いて５ページを御覧ください。「３ 施策の方向性」につきましては、本計画で目指す千葉県の姿を「誰もがあたりまえのように県民活動に参加し、地域みんなの力で未来を切り開く千葉県」としております。

また、施策の体系についてですが、本計画では、「１ 県民活動への理解や参加の促進・定着」、「２ 市民活動団体等の基盤強化等の支援」、「３ 多様な主体による連携・協働の促進」といった三本の柱を、施策の方向性として整理を行い、それぞれの柱ごとに重点的な取組について行動計画を定めています。

また、成果指標につきましては、それぞれ施策の方向性ごとに成果指標を全部で７つ付しています。成果指標の達成状況については、別途御説明させていただきます。

簡単ではございますが、現計画の概要は以上でございます。

つづきまして、令和６年度に実施した事業の概要及び実施結果及び令和７年度実施事業につきまして御説明いたします。

まず、計画に掲げる施策の方向性の三本の柱に沿った成果指標について、令和６年度末の状況を御説明させていただくとともに、柱に掲げる行動計画ごとの関連事業について説明させていただきます。

令和６年度実施事業については１７ページに一覧を掲載していますが、事業数が４３と多いので、施策の方向性ごとに主な事業について、説明させていただきます。

令和７年度実施事業については、資料２に一覧がございますので、併せて、御覧いただけると幸いです。

それでは資料１の１８ページを御覧ください。成果指標については、オレンジ色で令和４年度の結果を基に、令和５年から７年度の計画期間の最終年である令和７年度までに達成する目標を設定しております。また、推移としまして青色で平成２９年度から最新の令和６年度の数値を記載しております。

まず、一つ目の柱である「県民活動への理解や参加の促進・定着」に係る成果指標はいずれも県政世論調査によるものですが、「市民活動団体、ボランティア活動に関心がある人の割合」については昨年から2.1ポイント減少し46.8%となっています。二つ目の「ボランティア活動に参加したことがある人の割合」については2.5ポイント増加し45.0%となっています。また、「ボランティア活動に継続して参加している人の割合」については0.8ポイント増加し16.8%となっています。

次に関連事業ですが、19ページを御覧ください。一本目の柱である「県民活動への理解や参加の促進・定着」に関する事業ですが、行動計画の「(1) 県民活動の普及啓発の推進」として、まず1番の「千葉県ホームページやSNS等での情報発信」についてです。NPO・ボランティア関連の情報を集約した県ホームページ「千葉県NPO・ボランティア情報ネット」において情報発信を行ったほか、Facebook等のSNSを活用した広報を行いました。

また、2番のNPO・ボランティア情報マガジンの配信については、県のNPO・ボランティア関連施策やイベントなどの情報を月2回配信するメールマガジンで、昨年度末時点の会員数は2,779名となっています。

続きまして、20ページを御覧ください。施策の方向性1の行動計画「(2) 県民活動の体験機会の提供と定着の促進」として、8番の地域ボランティア活動環境整備事業ですが、この事業では大きく三つの取組を委託により行っております。一つ目がボランティアをしたい方とボランティアを受け入れて活動したい団体を結ぶマッチングサイト「ちばボランティアナビ」の運営、二つ目が活動経験のない方でも参加しやすい体験会の開催、三つ目がボランティアを受け入れる団体側の支援として、団体の人材確保、受入態勢整備のための研修や、ボランティアコーディネーターによる個別の助言・提案などの伴走支援を実施しています。

令和4年1月に開設しました「ちばボランティアナビ」の登録者数は令和6年度に倍増し、令和5年度末の1,174名から2,405名に増加しました。また、登録団体数も令和5年度末時点の114団体から164団体へ増加しました。直近の状況では、個人登録者が3,000名、登録団体が190団体を超えており、このサイトを通じたマッチングによるボランティア活動へ参加した方も延べ2,000名以上となっています。

また、令和6年度の体験会については、10回開催し、213名の方に参加いただきました。そのうち、令和6年度の新しい取組として、活動の体験に加えて、個人と団体、団体同士が交流できる「体験交流プログラム」を2回実施しました。今年度につきましては、体験会11回、うち体験交流プログラムを2回実施する予定となっております。

ボランティアコーディネーターによる団体支援については、令和6年度から新たに支援した団体が15団体、令和5年度からの継続支援として3団体の計18団体の支援を実施しました。今年度につきましては、新たにコーディネーター向けの勉強会も3回開催することとしています。

次の21ページ、行動計画「(3) 様々な県民活動で活躍する人材づくり」の10番、市民活動支援組織ネットワークについては再掲となりますので、31番で説明いたします。

この他にも、行動計画(3)につきましては、11番から25番まで庁内各課で実施する福祉、災害等の専門分野のボランティア等の育成、支援の取組について掲載しております。

続きまして、29ページを御覧ください。二本目の柱である、「市民活動団体等の基盤強化等の支援」に係る成果指標についてですが、市民活動団体の活動へ活動・寄附・支援等により参加している人の割合は県政世論調査によると、昨年から2.0ポイント増加し27.0%、寄附を受けたことがあるNPO法人の割合はNPO法人実態調査によると1.1ポイント増加し70.1%となっています。

続いて関連事業につきましては、次の30ページを御覧ください。26番の市民活動団体マネジメント事業は、市民活動団体やこれから市民活動を始める方を対象に、組織運営力、事業開発力、資金調達力を高めるための講座を中間支援組織等の企画提案により実施するものです。令和6年度は二つのテーマで、「団体運営の基礎をテーマとする講座」として労務、会計、危機管理等を4回開催し、延べ159名の参加があったほか、「事業力強化をテーマとする講座」としてAIのキホンや資金調達等をテーマに5回開催し、延べ378名の参加がありました。今年度につきましては、受講後のサポート体制の整備や、講座内容の見直しを行い、内容の充実に努めることとしています。

32ページを御覧ください。31番の市民活動支援組織ネットワークによる中間支援組織の機能向上と連携強化については、柱の1つ目の「様々な県民活動で活躍する人材づくり」にも該当していますが、市町村の市民活動担当課、市民活動支援センター、民間の中間支援組織、県社協を構成員として、「市民活動支援組織ネットワーク」を運営しており、支援組織に必要とされるノウハウや知識を取得するための研修や交流会、連携強化のためのワークショップなどを実施するものです。令和6年度は、幹事会3回、本会議を「県内の市民活動支援事例」などをテーマに3回開催しました。今年度も7月29日に1回目の幹事会を開催し、本会議を3回開催する予定です。

続いて35ページを御覧ください。三本目の柱、「多様な主体による連携・協働の促進」に係る成果指標について、「地域の様々な主体と連携している市民活動団体の割合」は、NPO法人実態調査によると、3.0ポイント減少し61.1%となっています。2つ目の「市町村行政・県行政と市民活動団体との協働事業の件数」については、7件減少し686件となっています。

36ページからの関連事業ですが、行動計画「（１）地域コミュニティにおける様々な主体の連携・協働の推進」として、35番の協働によるコミュニティづくりの普及促進については、協働の促進に課題を抱えている地域等を対象に、市町村と連携し、多様な主体の協働による取組を検討する契機となるよう、協働のまちづくりセミナーを年6回開催しています。令和6年度は「多様な主体との協働」などをテーマに実施しました。今年度も昨年度と同様に、各地域で開催する予定です。

続きまして37ページ、36番のちばコラボ大賞ですが、多様な主体がそれぞれの地域の特性を生かしながら、地域社会の課題の解決に取り組む事例の中から、他のモデルとなる優れた事例を表彰しまして、広く県民に周知するというものです。令和6年度は22事例の応募の中から「人と人とのつながりや、心の関わりを大切にした地域交流拠点事業」など、3事例を表彰しました。令和7年度は現在応募事例の募集を行っているところですが、第15回目の実施となることを記念して、これまでの受賞事例を振り返り、連携による地域づくりの機運を更に高めるため、6月に特別講演会を開催したところです。また、ちばコラボ大賞の趣旨に賛同する企業・団体が表彰事例を選考する「特別賞」の創設に向けて準備を進めているところです。

次に39ページ、行動計画「（２）市民活動団体等と県・市町村との協働の推進」として、41番の「市町村と市民活動団体との連携促進事業」ですが、これは市町村の協働に関する取組や市民活動支援センターの機能強化を支援するため、専門家の派遣等を行うものです。令和6年度は、「協働とコミュニティ「地域の活力をどのように活かすか？」」をテーマに成田市へ関谷先生を派遣させていただくなど、計8市町村に対して、専門家の派遣を実施しました。今年度も、多くの市町村から要望があり、8市町村に対して、専門家を派遣する予定です。

駆け足となりましたが、令和6年度実施事業の結果及び令和7年度の実施状況についての説明は以上になります。

○鎌田座長

ありがとうございます。

事務局から御説明いただきましたが、お気付きの点等ございましたら是非お願いします。特に、委員の中で事業に直接関わっている、協力されているというところでお気付きの点がありましたら補足等含めて御発言願います。

NPOクラブさんは色々なところで関わっていますが、特に補足等はありませんか。

○牧野委員

30ページの市民活動団体マネジメント事業において、NPOクラブが一つコースを担当させていただ

いています。昔のようにNPO法人数が一年間に200法人とか100法人とか増えていた時代というのは運営をどうするかがとても大きなことでした。今はそれほど新しい法人ができていないわけでは不是けれど、古い団体でも新しい人に事務局がかわっていったりするので、団体運営の基礎というところは地味ですが、県の事業として肅々と進めていきたいと思っています。

令和7年度についてもNPOクラブが採択され、予算も少し増え、中身をランクアップできるような形にできればと考えています。また、やはりコロナ後はオンラインでの講座開催というのが特徴的であると思いますが、どうしてもオンラインだとリアルとは異なり後日視聴となってしまうのではないかと不安で、後日視聴でも参加者としてカウントできますが、参加者アンケートをきちんと出していた方のみ参加という取り扱いにしたいと考えています。

千葉県では新しくNPO法人として設立する法人は1年間にどれくらいありますか。

○事務局

具体的にどれだけ増えたかを示す資料は手元にありませんが、新しく増える法人もある一方で、高齢化等を理由として解散する法人もあり、千葉市も含めた千葉県の認証法人の数としましては、令和6年度が1,925件、令和5年度が1,943件ですのでこの1年で18件減っている状況です。また、近年の傾向としては平成29年度の1,999件をピークに現在は少しずつ減っており、年間10件前後減っている状況が見受けられます。

○牧野委員

全国的に数は減っています。NPO法人だけが課題解決とか価値創造をしているわけではなく、一般社団法人等色々な法人形態があり、バラエティに富んでいることが今回の「共創」というところにつながっていくのではないかとと思っています。

○鎌田座長

次の議題につなげていただきありがとうございます。

高橋委員いかがですか。

○高橋委員

なぜ法人数が減っているのか、辞められる方はどのような理由なのか気になったのですがいかがですか。

○事務局

解散の理由としては、役員の高齢化が一番多いと思います。それ以外では、事業の目的を達成したとか、近年では物価高騰の影響を理由に挙げているところもあります。

○高橋委員

高齢化とか物価高騰等については身近でもすごくあります。高齢者に対する食事サービスなども同じ理由で辞められたりしています。

○鎌田座長

山本委員、今の世代交代の話についてはいかがですか。

○山本委員

牧野委員もおっしゃっていたのですが、NPO法人で活動してきて事業が拡大し社会福祉法人に移行した法人も知っているし、また、福祉の分野では、別の形の合同会社とか形態を変えて事業展開する法人も出てきているので、NPO法人で活動していく意義についても世代交代のタイミングで考えていくところもあるのかもしれない。

○鎌田座長

法人のバリエーションが増えていますね。

○山本委員

NPO法人では、私たちのところもそうですけれど、誰もが活動できるというところで、ボランティアベースで活動してきましたが、ボランティアで活動していけるパワーをどれだけ続けることができるかというのは直面している問題です。

○鎌田座長

橋爪委員、市町村の立場で、柏市から見てどうでしょうか。

○橋爪委員

柏市では、NPOに限らず、公益活動団体は微増です。気になったのは35ページ、町会・自治会等の地縁組織は解散しているところも出てきていて、やはりここで連携というポイントが3ポイントダウンしているという傾向になっている。地域社会との連携というのが目標値10%アップで設定していますけれど、行政と共に二本柱で支えている地縁組織をもう少し元気付ける方法がないのかなというのが一番気になった点です。

○鎌田座長

具体的に何かヒントになりそうなものはありますか。

○橋爪委員

すぐに解決できない問題だと思いますが、先ほどのNPOの解散と同じように役員の高齢化も始まっていますし、ゴミ出しもできない高齢者が町会に入っている意味がないと脱会したり、若者の方が町会に

入っていても地域コミュニティの意味が分からないという声を多く聞くことや、働き盛りの方は貴重な休みの日の時間を地域に割くことができないとか、色々な理由で地域がどんどん弱くなっています。特効薬はないと思うのですが、今は、地域活動のデジタル化とか、地域の運営の負担を軽減してあげようという施策を中心に取り組んでいます、良い方策があれば是非教えていただきたい。

○鎌田座長

色々なことを模索しているということですね。

○橋爪委員

おそらく全国でもそうだと思います。

○鎌田座長

伊藤委員、県内幅広く情報をお持ちだと思いますがいかがでしょうか。NPOセンターの自治会支援・町会支援等も含めて。

○伊藤委員

地域活動の取材から最近離れているので分からないのですが、自分の経験から言うと、私も集落の様々な活動の実働部隊として動く青年会に加入しているのですが、私が一番年齢が若いほうで、平均年齢が70歳近く、年齢制限を設けると担い手がいなくなり団体自体がなくなってしまう状況です。そういう意味で地域活動の担い手というのは少なくなっている実感はあります。ただ、県内全体がどうなのかについては把握できておりません。

○鎌田座長

市民活動やNPOについてはいかがでしょう。

○伊藤委員

福祉や地域づくり・まちづくりについていくつか取材したことがありますが、世代交代等の実態に関する課題までは踏み込んで取材してはいませんでした。

○鎌田座長

山本委員のところでそういった課題に取り組んでいると思うので、是非取材していただくと色々な問題がつながっていくかと思います。

伊藤委員は本懇談会への参加が初めてということなのでお伺いしますが、資料1「千葉県県民活動推進に関する年次報告書（令和6年度）」の全体像と言いますか、目標を決めて達成数値を確認するといった流れで議論を進めていくのですが、それについてはお分かりになりましたでしょうか。

○伊藤委員

はい。

○鎌田座長

私たちは見慣れ過ぎているところがあるので、ここはというところがあれば御意見をいただきたいのですがいかがでしょうか。例えば、達成できるか微妙な目標値を設定していたり、残念ながら実績値が下がっていたりしますが、その点についてはいかがでしょうか。

○伊藤委員

「市民活動団体、ボランティア活動に関心がある人の割合」は下がっているのに「ボランティア活動に参加したことがある人の割合」は増えていたりするところは理由がよく分かりません。

○鎌田座長

定性的に聞いているので誤差の範囲と言えなくもないかもしれません。

関谷委員は多くの講演等色々なところで御活躍されていると思いますがいかがでしょうか。

○関谷委員

先ほどからお話が出ているように個々の活動団体、特にNPO等は、新たに設立される法人もありますが、解散する法人も増えているということで、世代交代も含めて基盤強化を今後どうしていくかが問われていて、現在は個々の活動団体をどう強化するのかという視点と、人的・資金的リソースが脆弱化していることから連携していこうという視点に分かれていると思います。

多様な主体の連携については気になっているところがあって、個々の活動団体が厳しいから連携しようという動きが少し足踏みしているという印象を受けています。個々の市町村を見ていると、総論としては多様な主体による連携・協働について賛成またはその必要性を認識しているけれど、具体的にどのような形で連携していけばよいのかという点については、後ほど議論する「共創」が関わってくるとは思います、それぞれのところで戸惑いがあるように感じます。例えば、NPOと地縁団体との連携というのは言われて随分経ちますが、まだまだ市町村によっては課題に挙がっています。

多様な主体ということで、今これも大きく二つの流れがあると感じていて、一つはコラボ大賞等で見られるように地域の方で横の連携を作っていこうという動きが出ているところは出始めていますが、そうではないところは全然出てこない。他方で、もう少し仕組みとともに絡めていこうということで、今全国的に広がっているのは小学校区単位ぐらいの協議会活動、例えば、まちづくり協議会のようなものを作っていこうという動きがあるのですが、その動きも他の都道府県と比べると千葉県は少し弱い印象を受けます。

県内どの市町村も認識はしているのですが、立場を超えて多様な主体同士で話し合うという場づくりが

まだまだ足りていなかったりとか、あるいは、制度設計を行って活動しているところもあるのですが、連携して何をすればよいのかが十分に認識されていないというチグハグ感があり、地域の方でもそういう戸惑いがあり、役所の方でもその辺をどのようにつなげて進めていけばよいのかということで戸惑いを見せている印象を受けるので、後ほど、「共創」という話も含めて、うまくもう一步踏み出していけるとよいと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。関谷委員がおっしゃったように、足踏みの中での連携というのと、攻めの中での連携という構図は分かりやすくよいと思います。そこら辺、事務局の活動の中でお気付き点はありませんか。

特に、上原氏が関わっている「ちばボランティアナビ」は非常につながっていて実績が上がっていると思います。攻めと守りの話の観点で見ていくと伸び筋はどこなのか。関谷委員がおっしゃるようにコラボ大賞なんかはだいたい攻めの部分であり、そういった攻めの部分を求めつつも、実際ニーズが多いのは守りの中でどうやって連携を図っていくかであり、なかなか近づきにくい部分とかがあると思いますが、その辺のことについて事務局はどう考えていますか。

○事務局

関谷委員からお話いただいたとおり、コラボ大賞については、昨年度22件、その前年度も27件と近年、かなり応募が増え、取組としても非常に素晴らしいものが増えてきており、このため、今年度は特別賞の創設を検討しているところです。

一方、こういう素晴らしい取組が増えているという中で、先ほどの資料の35ページの指標のところ「地域の様々な主体と連携する市民活動の割合」が、令和6年度で61.1%となっており、平成29年度以降の推移を見た中でも減少傾向というか伸び悩みがあるという認識をしており、団体の高齢化や、マネジメントの部分に課題があることなどが原因ではないかと考えています。

「ちばボランティアナビ」につきましては、順調に登録者が増えており、個人の登録者は3,000名を超え、団体の登録者も190団体を超えたという状況です。団体の方からの話ですと、なかなかボランティアを集めたいと思っても集められない中で、ちばボラナビで登録するとすぐにボランティアが集まってくれるとのことで、ご好評をいただいております。我々としては、コラボ大賞として素晴らしい取組を募集しつつ、ちばボラナビを積極的にアピールし、人手不足という中で、団体とボランティアをうまく結びつけていきたいと考えています。

○鎌田座長

NPOクラブさんは「ちばボランティアナビ」に色々と御協力していて、そのつなぎの部分で工夫していることがたくさんあると思いますがいかがでしょうか。

○牧野委員

県内のボランティアを受け入れそうな団体をリストアップし、多くの団体に1件1件連絡して、返事待ちの時はもう一度プッシュしています。

例えば、四街道市の「みんなで地域づくりセンター」で5月にこども万博というこどもの支援団体のお祭りを開催した際、この「ちばボランティアナビ」にエントリーしたら、埼玉からボランティアの方が来てくれて、あまり想定していなかったのですが、東京とか県外の方も「ちばボランティアナビ」を見ているということにそこで初めて気が付きました。そういう風に「ちばボランティアナビ」はとても機能していて、若い方がウェブで色々なところを探すのに分かりやすいのかなと思いますし、県内だけじゃないというのはお伝えしたいと思います。

○鎌田座長

埼玉の方も関係人口ということでつながっていたのですか。

○牧野委員

ボランティアをしたいという外国の女性の方で、事前にボランティア説明会をオンラインで開催したのですが、当日本当に埼玉から来てくれるか心配だったのですが、ちゃんと一番に来てくれ、初めて四街道市に来ましたとおっしゃっていました。「ちばボランティアナビ」の力、ウェブの力、ITの力って改めですごいなと感じました。

○事務局

登録者の特徴としましては、10代、20代の方が5割以上を占めており、若い方が積極的に活用していただいているという状況です。ただ一方で、30代、40代の方の登録者が少ないという状況があることから、今年度は新たにフェイスブックを活用したインターネット広告を実施したりするなど、幅広い世代の方に登録していただけるよう取り組んでいるところです。

○鎌田座長

ありがとうございます。議題1、2に関してほかにはいかがでしょうか。

それでは、今までのお話の中で議題3の推進計画に繋がる部分も出てきていたので、次の議題3について、事務局から説明をお願いいたします。

議事（３）次期千葉県県民活動推進計画（骨子案）について

○事務局

それでは資料３を御覧ください。まず、次期計画の策定にあたっての考え方ですが、現計画を継承しつつ、これまでの取組の成果、あるいは県民活動を巡る新たな課題、市民活動団体の現状等を踏まえ、策定を行いたいと考えております。

県民活動を取り巻く状況としましては、先ほどの議題１の御説明の中で、「市民活動団体、ボランティア活動に関心がある人の割合」が昨年から２．１ポイント減少し４６．８％となったとお伝えしましたが、このうち「あまり関心がない・全く関心がない」と回答した割合が、７０代以上では男女ともに３割台であるのに対し、２０代男性が８割、４０代男性が７割を超えるなど、世代や性別によるボランティア活動への参加意欲の偏りが見られます。

次に、以前から言われていることですが、市民活動団体においては、団体運営の担い手が不足し、団体内全体の高齢化が進むなど、市民活動団体の脆弱な活動基盤が変わらずあると考えております。

また、連携・協働に関する取組については、近年、地域課題の解決を発端とするものだけではなく、例えば、地域の資源を活用したい、地域が好きだというような思いから連携・協働が広がり、深化している取組も見られます。

これらの状況を踏まえ、取組の方向性として、一つ目に、世代や性別によるボランティア活動への参加意欲の偏りがあることを踏まえ、例えば、子育て世代でも参加できるボランティアプログラムの充実を図ることや、職業上のスキル等を活かした活動であるプロボノの促進を行うなど、誰もが気軽にボランティア活動等の社会貢献活動に参加できるよう、その人のライフステージに応じた参加方法・機会を提供し、活動を定着させること、二つ目に、組織運営力や資金調達力など市民活動団体等のマネジメント力を高めるための研修を実施するなど、市民活動団体が安定的、継続的に活動していくことが出来るよう運営基盤の強化の支援を推進すること、三つ目に、多様な主体による連携・協働の促進に加え、新たな価値を創出する取組である「共創」を推進することを次期計画では取り組んでまいりたいと考えております。

三つ目の「共創」の考え方について、「「共創」の定義について」にてご説明させていただきますので御覧ください。「協働」につきましては、現計画において、「対等な二者以上の主体が共通の目的を持ち、それぞれの特性や強みを生かして協力して取り組むこと」と規定しております。

一方、「共創」は、「この協働を通じて、多様な主体がそれぞれの視点や価値観のもと多方面から意見を出し合いながら、互いの特性や強みを生かして、新たな地域活性化の取組の実現、これまで活用されていなかった資源の発掘や新たなサービスの創出など、新たな価値を創出すること」を定義として考えてい

ます。

この「共創」には、地域の課題解決のための取組を契機として、新たな価値の創出に発展する取組である「発展型」と、課題解決を契機とせず、地域の資源を活用して地域社会をより豊かにしたい、地域が好きだというような思いから新たな価値を創出する「創造型」の2種類があると考えています。この「共創」の取組も新しい計画では推進して参りたいと考えております。

資料3に戻りまして続けて御説明いたします。（3）の計画期間につきましては、計画に基づく取組を着実に進めていくため、現行の3年間から、令和8年度から12年度までの5年間としたいと考えております。

続きまして、「2 計画の骨子案」についてですが、この計画は、県総合計画を踏まえ、県民活動の推進のため県として取り組むべき方向性を定めるものでございます。現在、県では新たな総合計画の策定を進めているところであり、新総合計画の素案において、その基本理念は「千葉の未来を共に創る県民を守り、支え、そして飛躍する千葉の実現」となっています。先ほどご説明いたしました、取組の方向性と県総合計画の方向性を踏まえまして、次期計画において目指す千葉県の姿として、現計画の「誰もがあたりまえのように県民活動に参加し、地域 みんなの力で未来を切り開く千葉県」から、「誰もがライフステージに応じて県民活動に参加し、地域 みんなの力で未来を共に創る千葉県」へ変更したいと考えております。

施策の方向性について、現計画の一つ目の「県民活動への理解や参加の促進・定着」は現行計画と変わりませんが、前回懇談会でもお示しさせていただき、委員の皆様からも前向きなご意見をいただきましたとおり、「行動計画」に、「ライフステージに応じた」という文言を追加するほか、今回新たに、三つ目の施策の方向性「多様な主体による連携・協働の促進」に、「共創」の促進を加え、行動計画も「地域コミュニティづくりと、様々な主体の連携・協働・共創の促進」としたいと考えております。

次に、資料5のイメージ図について御説明いたしますので御覧ください。現計画では、「様々な主体による地域課題解決のイメージ」として、前回の懇談会においてもその修正案をお示しさせていただいたところです。

次期計画においては、地域の課題やニーズに加え、地域社会をより豊かにしていこうとする思いを発端に、様々な主体が、「地域課題の解決」や「新たな価値の創出」に向けて、「連携・協働」に加え、「共創」の場を通じて取組を進めていきたいと考えています。こうしたことが分かるよう、前回懇談会でも「みんなが自分事として自分の生活や生き方につながっていくイメージがわかりやすいとよい」という御意見もいただきましたので、大きな一つの輪に様々な主体を配置する、このようなイメージ図を作成い

たしました。この、「連携・協働・共創の場」を通じた取り組みによって、持続可能な地域社会の構築を図り、さらに新しい課題やニーズ等が発見されて、取組が循環していく、というイメージで考えています。

最後に、資料3に戻りまして、今後のスケジュールについて、説明させていただきます。計画骨子案につきましては、本日の懇談会の意見をいただきまして、骨子案として決定させていただきたいと考えております。

その後、計画の素案を作成し、10月中～下旬を目途に第2回の懇談会で皆様から御意見をいただきたいと考えております。計画素案については、市町村、県庁各課にも意見照会するほか、今回新たに大学生からの意見聴取を実施したいと考えており、現在、千葉工業大学、淑徳大学、城西国際大学の3大学にご協力いただき、意見を伺う予定です。

それらの意見を踏まえて修正したものを、第3回の懇談会でお諮りし、計画案として決定していきたいと考えております。第3回の懇談会は、12月中～下旬を予定しております。

その後、1月下旬～2月上旬を目途にパブリックコメントを実施し、いただいた意見を踏まえ計画最終案の検討を行います。

最後の第4回懇談会は3月中旬を目途に開催し、最終案に対して皆さまから御意見頂戴できればと考えております。

以上で、次期千葉県県民活動推進計画の策定についての説明は以上になります。是非忌憚のない御議論、御意見をいただければと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。非常に分かりやすい資料を作っていただいたと思います。

まず、資料3の次期計画策定の基本的なスタンス、その後、「共創」というキーワード又は定義、イメージ図、ライフステージという考え方を取り入れていきたいというところが御説明のあった骨子の内容だと思いますが、どこからでも議論いただいても構いませんし、先ほどの議論の延長でも結構ですので、お気付きの点があれば御発言願います。

山本委員、お気付きの点はありますか。

○山本委員

新しい言葉として「ライフステージに応じて」というのは、今までの懇談会でも結構出ていた意見だと思います。私も実感としては、先ほど「ちばボランティアナビ」の話もありましたけれど、船橋市は夏休み期間に「地域に飛び出せ！！ふなばし夏のボランティア体験」ということで中学生、高校生にボランティア活動に取り組んでもらうという取組を行っていて、それは中高生が市長と話すような場でボランティ

アを行ってみたいと意見したことから5、6年頃前から始まり、毎回200人程度が参加しています。

小学校からも恐らくボランティアは授業で取り扱うようになってきていると思うので、小さい頃に関心を持つというところと、10代、20代で体験でもいいので取り組む機会を持ってもらうことで、その後の課題となっている30、40代、あるいは50代かもしれませんが、そこをどういうふうにしていくかということも、「ライフステージに応じた」とすることで具体的な行動計画を立てやすいのではないかと思います。

60代、70代、今、定年の年齢もどんどん上がっているので、現役って何歳までだろうと思うのですが、私たちの周りでいうと、最近では、やはり60代後半ぐらいでお仕事を辞めて地域で活動される方が、私たちのところに来てくれるようになっていきます。自分のためにもなる生きがい・長生き・健康にというようなところも大事なのかなと思いますので、ぜひここは入れていただけたらと思います。

あと、「共創」というのは、県の計画にも入ってくるような考え方だと思いますが、イメージも含めて色々とお話ができたらと思います。

○鎌田座長

特に、図で示しているようなこのイメージも含めて、今の段階でいかがでしょうか。スケジュールにもありますように、まだ今日で全て決めるということではなくて、今日は色々な御意見、広がりをつ捉えておきたいと思っています。

○山本委員

「共創」という言葉はすごく良いと思うのですが、「協働」を通じて、その次の段階というようなことなのか、だとすると、先ほど関谷委員がおっしゃった「協働もまだまだ」なのに、取り残されるという言い方は変なのかもしれませんが、「協働」より更に関わりづらくなるという懸念も感じました。

○鎌田座長

ホップ・ステップ・ジャンプがホップ・ジャンプになるようなイメージですか。

○山本委員

そうですね。「協働」の上にということでもないのではないかとということと、①発展型と②創造型は新しい言葉なので、こういった型を示していただくのは分かりやすいと思いますが、地域課題の解決のための取組を契機としてなのか、契機としてないのかという分け方だと、そこに含まれないようなことがあるのではないかと思います。

○鎌田座長

その辺は結構大事だと思います。

○山本委員

これはまだ（案）なので、地域の課題解決のための取組を契機とするのか契機としないのかということもありますが、「共創」につながる何か違うものがありそうな気がします。先ほどのホップ・ステップ・ジャンプではないですが、「協働」をしないもう少し緩やかな「共創」というものはないのでしょうか。もう少し型というのは広がりがありそうな気がしました。

○鎌田座長

ありがとうございました。

○牧野委員

中学生のボランティア参加ということであると、この「ライフステージに応じた」というところで、どうしても20代、30代という視点で今まで話してきたなと思ったため、「こども・若者」という言葉をどこかに明記した方がよいのかなと感じました。やはり、地域に愛着を持っていくとか、地域の大人たちと住んでいるところで何かを体験をしていくというのは、やがて20代、30代になった時のボランティアとか地域を考える糧になるかなと思うので、言葉として「こども・若者」というのを入れた方がいいと思いました。

そして、「共創」という図がとても色々な主体が関わって、新たな価値をつくる、課題解決をするというイメージがすごく伝わるのですが、例えば、ここにある学校・大学のところに「こども・若者」も入ると思うので、この中に「こども・若者」という言葉があれば、また、企業の中に「事業者」といった言葉が入ればよいのではないかと考えました。

○鎌田座長

こういう感じでどんどんお気付きの点やアイデアを膨らませていただければと思いますが、伊藤委員、いかがでしょうか。

○伊藤委員

今おっしゃっていた「ライフステージに応じた」という部分について、きめ細かい体験会の拡大というのは、敷居を下げることに繋がると思います。同じ世代の方が参加しやすい、同じ関係になるし、話しやすい環境になるので、環境づくりが必要だなと思いました。

「共創」という考え方については、今もあるんでしょうけど、やっぱりマッチングと言いますか仲人役が大切ではないかという印象を持ちました。

○鎌田座長

「共創」の定義の部分はいかがでしょう。

○伊藤委員

課題解決が一つの定義となることについてはよく分かるのですが、それがなかった場合というのがよく分かりません。

○鎌田座長

ありがとうございます。それでは、橋爪委員いかがでしょうか。

○橋爪委員

柏市の話になってしまうのですが、地縁組織の将来の持続可能な活動支援が、本市の最大の課題とされています。

「協働」という言葉が登場して何十年か経っていると思いますが、柏市の中では、まだまだ「協働」すら進んでいない状況です。NPO等の協力もあって創造型の「共創」については思いつくものが何件かありますが、特に、地縁組織は、新たな価値の創出というよりも既存の課題解決が最優先ですので、そういう意味で、まだまだ「共創」という意味合いのレベルまでは届かず、さらに「協働」を深めていくしかないのではないかという感覚ではあります。両面で地縁組織を支援していければよいと思いますが、「協働」が進んでいない状況なため、なかなか難しいと感じています。

○鎌田座長

例えば、「協働」の次の段階の「共創」ではなくて、直に「共創」という定義を見た場合、柏市の方は戸惑いますか。

○橋爪委員

まずは「協働」との違いは何なのかというところだと思います。地域をよく知る、地域含めて良かったという実感を与える上では創造型というのは非常に意味があるものだと思いますが、生活の課題解決が多いため、新たな価値というのはなかなか結び付きづらいのではないかと思います。そういう意味では戸惑うと思います。

○鎌田座長

例えば、資料5のイメージ図に表現するとしたら、真ん中のところに、関谷委員が整理してくださった足踏みしている上での連携と、一歩踏み出す攻めの連携の二つがある、または、それに近い概念で整理する感じになるのでしょうか。多くの県民が見て、これだったら戸惑わないと思うのは並列で描かれているイメージでしょうか。

○橋爪委員

「連携・協働・共創」が一括りになっているので、共通した部分もあるとは思いますが、恐らく「連携」

「協働」「共創」それぞれで強い分野があると思うので、その辺の住み分けがあればもう少し分かりやすいのではないかと思います。

○鎌田座長

「協働」の成果を図化するのであれば割と分かりやすく図化できるかもしれませんが、「協働」を図化すると「協働」のプロセスを図化することになるから、色々な線がたくさんつながって、色々な団体がたくさん存在して、結局何を言ってるか分からなくなるジレンマもあります。その中で、果実として何を描くかということだと思いますが、高橋委員、何か良いアイディアはありますでしょうか。

○高橋委員

アイディアはなかなかないのですが、資料5のイメージ図のようなものは、地域では、もう少し小さくしたものを使っています。地域包括支援センターとか、ここに出ている学校や教育委員会とか、色々なところで私たちもこういうものを作って活動していて、今お話いただいていたように、意外と「協働」しつつあるというのを地域の中では感じています。

例えば、社会福祉協議会の地区社協では、問題を抱えている人たちがいらっしゃったときに、色々な所につなげていくという取組を行っています。また、私は民生委員も行っているのですが、民生委員の活動の中でも、民生委員が全てを解決できるわけではないので、色々な所につなげており、こういったことは正しく「協働」が成立しているかなと感じているところです。

資料5の「共創」を含めたイメージ図については、なるほどなと思っはいるのですが、この真ん中の地域課題の解決について、もちろん地域課題の解決のために周りの輪があるのですが、ここの中心はどうなっていくのかを考えてしまったので、この辺について県に説明をしていただけると助かります。

○事務局

様々な団体が手を取り合って連携することによって、地域の課題解決につながるということをシンプルに表したものがこのイメージ図になります。

一方、市民活動、県民活動というのは、地域の課題解決というところが基本であり、そこで今、並列になっているところについては、もう少し工夫が必要なのかなと思います。

○高橋委員

地域の活動をしている私たちは、本当に生々しいものに触れているので、形の上でこういうふうには作られた中で、ではどんなふうに向いていくのかが、大きくなったときによく分からないということを今、私は感じているところです。

○鎌田座長

高橋委員、ライフステージの話についてはどうでしょうか。

○高橋委員

先ほど牧野委員がおっしゃっていたように、ただライフステージと書くよりも、もう少し細かいものがあつた方が分かりやすいと感じました。企業のところも事業者とかそういった文言を入れていくことが分かりやすいのかなというふうに感じていますので、イメージ図にもう少し文字を足していくのもよいのかなと思いました。

○鎌田座長

そういう意味では、社会福祉協議会と大きく入っていますがその点についてはどうでしょうか。

○高橋委員

県の社会福祉協議会は大きく入っていますが、市町村社協や、市町村社協の下にある地区社協に関する問題について、県としての動きがどうなのかということが非常に気になります。

○鎌田座長

例えば、地区社協にしても個人が色々と見えてくると思います。先ほどの事業者や子ども・若者のように高齢者と一括りではなくて色々と出てきそうですね。

○高橋委員

やはり個々の色々な問題は別々になっていますので、そういったものを分析することも必要かなと思います。一括りに高齢者と言ってしまうのではなくて、高齢者でも身寄りがない高齢者もいれば、お金を持っているけれども一人で寂しい思いをしている高齢者もありますし、家族があっても家族に遊びに来てもらえない方もおり、本当に色々な場合があるので、生々しいというのは、そういうことを含めて申し上げました。

○鎌田座長

それを例えば、皆さんが納得するようなイメージ図にすることは可能なんでしょうか。無理だということも分かるのですが、県の立場からしたら、抽象度は高いのだけれど目指すべきものを伝えたいと思うので、そこについて何とか知恵を絞りたい。

それでは、関谷委員はいかがでしょう。

○関谷委員

私なりの考えを申し上げますと、資料3の部分で、次期計画に向けて新たに「ライフステージに応じて」を加えたことは非常に良いと思います。

市民参加というのは、どういう立場の人が、どういうところで、どういうふうに入っていけばよいのかというところが少しぼやける部分があるので、そういう意味では、例えば、子育て世帯がどういうところに入っていくのかとか、あるいはリタイア層がどのように入っていくのかということを分かりやすく見せていくことが必要だと思います。私なりの言い方だと、地域に参加していく入り口を少し整理しながら見せていくというのは、活動する側からすると情報も整理しやすいし、私はここだから関心があるんだというふうな見え方もできるのかなと思います。

そういう意味では、ライフステージに即して、入り口だったり、あるいは支援の形だったりというものを整理していくということは良いことだと思います。私が色々な講演で使う言葉で申し上げると、ライフステージというのは要するに「生まれる・育つ・学ぶ・働く・老いる・死ぬ」というステージがあるわけです。それぞれに、恐らく、市民参加、県民参加できる入り口があり得るわけで、そういう視点からすると、どこでどういうことが求められるか、先ほどマッチングという話がありましたけれども、どういう部分で今ボランティアというのが問われているのか、どういう活動があるのかということを見せることもできます。

また、私は、うちの大学の看護学部の人たちとエンド・オブ・ライフケアというテーマについて共同研究を行っていますが、エンド・オブ・ライフケアというのは正に死ぬというステージをどう考えるかというテーマです。今やはりケアの最前線での問いというのは、最期をどう迎えるかという問いであり、本人の自分がこういうふう to 最期を迎えたいという望みを叶えさせてあげるとというのが、QOLの一つの形だということで、ケアの最前線のそういう支援をどうできるか、そういう意味ではコミュニティ等とすごく連動した動きというものに今なってきているところがあります。

連動している部分というのは、最期をどう迎えるかについて情報もない、どういう風に考えればよいのかも分からないということで、例えば、今、最期をどう迎えるかについて語るカフェが色々な所で作られ始めていて、そこにはもちろん専門家も来るし、どうすればよいのか迷っている方々も来ます。そうすると、こんな考え方もある、どんな準備が必要であるかなどが分かるので、そういう場を地域の中でどんどん作っていき、そこに皆が参加して、色々と情報共有をしよう、支援の輪を広げていこうという動きが出てきています。

そういうことも含めて、ライフステージそれぞれで必要とされる入り口というのがあるのかなというふうに思いますので、ライフステージという非常に良いキーワードが入ってきて伝わるのかなという印象を受けました。

それから、私は「協働」と「共創」は区別した方がよいと最近思い始めていて、「協働」というのは、

今定義いただいているように、「対等な二者以上の主体が共通の目的を持ち」ということで、主体に注目した概念だと思います。つまり、従来の活動単位というのは、個々の単位で自治会とか、NPOとか、地区社協とか、PTAとか、そういう個々の主体を想定していたのですが、「協働」が通ってきたこの20年、30年は、個々の活動主体がそれぞれだけで活動しているのではなくて、やはり横につながろうというふうに取り組んできました。だから、多様な主体の連携というのは、正に「協働」を言い表している言葉で、主体が連携するということを言っているのだと思います。

それに対して、「共創」というのは、まだまだ新しい造語という部分ではありますけれど、私の理解では、主体に着目するのではなく、活動内容とか実践に焦点を合わせている概念だと思います。そういう意味では、どちらからどちらへというのではなくて、主体に注目した概念と実践に注目した概念に分けて整理すると分かりやすいというのが私なりの整理です。

そして、実践ということで資料3で定義されているのが「協働を通じて、それぞれの視点や価値観のもと多方面から意見を出し合いながら、価値創造をしていく」ということで、中身はこれで良いと思います。価値創造というのが正に実践ということであって、「共創」の中身になるかと思います。だから、「協働」で「共創」していくとか、多様な主体で新たな価値創造をしていくという使い方もあるかと思います。

そういう意味では、主体に注目するのか実践に注目するのかという違いで整理してみて、その上で、資料5のイメージ図については、今の私の整理で申し上げると、多様な主体の連携ということを表しているのもこれは「協働」の図だと思います。

他方で、「共創」を表すために何を入れればよいかというと、実践内容の柱を入れた方がよいと思います。では、実践内容の柱について何を思い付くかということ、これには二つあって、一つは地域コミュニティの再構築で、もう一つは横断的な事業展開です。要するに、多様な主体でもって何を実践するのかというと、一つは地域コミュニティを構築する、例えば、自治会をどうするかとか、学校をどうしていくのかという色々な課題があるにしても、コミュニティをどうするかというのは、やはり現場では大きな問題になっていますから、この辺をどういうふうに考えるのか。これはどちらかと言うと魅力創出系、先ほど課題解決系という言葉がありましたが、もう1つ魅力創出系という言葉があって、課題解決というのはよく使われますけど、魅力創出というのは、地域の現場とか市民の声を聞くと、課題解決というとは少し違和感がある。つまり、なぜ自分がこの地域に関わっているかということ、この地域が好きだから、ずっと住んできたから愛着があり、これが市民参加の動機になっている部分がすごくあります。ですから、その部分を丁寧に拾い上げないと参加の裾野がなかなか広がっていかないと思います。課題解決系ということで色々な人たちの動機を言い当てられる部分と愛着系ということで言い当てられる部分とで恐らく両方あり、そ

の辺も実践に関わってくると思います。

地域コミュニティの再構築というのは、課題解決系というのもあり得ますが、どちらかというと言着系であり、その辺も念頭に置きながらコミュニティをどう作っていくかというふうな視点での実践になります。

もう一つの実践の中身である横断的な事業展開ですが、これは分野の横断だとか、団体組織の横断とか、年代の横断とか、あるいはエリアの横断という形で、どちらかと言えばテーマ的に実践をしていくという意味です。

先ほどの鎌田座長の守りと攻めということと言うと、地域コミュニティというのは守りのところから再構築を図っていくのに対し、横断的な事業展開というのは攻めで、正にコラボ大賞等で事例として挙げられているような形で、どんどん価値創造ということで攻めの事業を展開していきます。先ほどの「ちばボランティアナビ」の話の県外から来るというのも一つの横断的な事業展開で、県外からの方もどんどん歓迎するそういう裾野が開いていくそういった実践をもう一つの柱として挙げておけばよいと思います。

もう一回整理して申し上げますと、「協働」と「共創」の違いというのは、主体か実践かの違いで、「協働」は、主体ということで従来どおりの多様な主体の連携でよく、そして、「共創」は、実践という形で位置付けていけばよいと思います。そして、実践というのは、課題解決系と魅力創出系の両方が含まれており、その柱というのは、地域コミュニティの再構築と横断的な事業展開の二つが考えられます。前者の地域コミュニティの再構築は、どちらかと言うと守りの部分ですが、これからコミュニティを再構築していかないと地域が回っていかないという部分も間違いなくありますのでそれをどうするか。他方で、攻めの方は既に色々と始まっていますが、裾野の門戸を開いていくという形になると思います。

このように整理すると、それぞれで対応する具体的な手法のようなものが出てくるわけで、例えば、市町村だと地域コミュニティの方がまちづくり協議会をどういうふうに作っていくのかを模索しているところであり、他方で、横断的な事業展開の方は円卓会議のようなものを位置付けて、どんどん攻めで、色々なテーマ、事業というものを展開しています。そういうイメージでいけば整理できるのではないかと思います。

○鎌田座長

事務局は整理できましたでしょうか。

○事務局

まだ噛み砕いて整理はできていませんが、「共創」の定義の中で「多様な主体による協働を通じて」とし、「共創」とは「協働」を推進していく中で生まれるものという考え方で定義付けをしています。

そういう定義付けでもよろしいでしょうか。

○関谷委員

色々に対応して模索する中で実践が生まれる訳ですから、そういう理解でよいと思います。後はどこにフォーカスしてこの言葉を使うのかということの違いだと思います。

○鎌田座長

要は、資料5のイメージ図のより中心に近いところを、更に詳しく示した方がよいのではという提案ですよね。

○関谷委員

そのとおりです。

○鎌田座長

関谷委員は前回時間軸と空間軸という話をされていましたが、時間軸というのはライフステージに近く、空間軸というのは先ほどのコミュニティの話とか、もしかしたら空間軸の中には個人も入ってくるのかもしれない。個人が動いて社会を作っていくと組織になって、組織が地域づくりを行うと空間軸になってくるわけですから。ここの中に、山本委員が①と②のほかにあるのではないのでしょうかと言われましたが、私も今度、大学生のヒアリングを行うということで感じるのは、個人から入っていく空間軸のようなものがあるのではないかと思います。地域や課題とか資源とかあまり考えないで、自分のやりたいことは何か、で自分のやりたいことを試してみたいということで、その場が地域だったり、ボランティアだったりするのかもしれない。それは一人かもしれませんが、そこら辺が想像にも至らない自分を試していく、チャレンジをしていくとか、そういうようなこともあるような気がしています。そういうことも含めて時間軸と個人も含めた空間軸とがあるのだと思います。

あと、攻めと守りの中に愛着と課題の軸をどう入れ込んでいくか。これもなかなか面白く、攻めが愛着で守りが課題ですが、守りは課題だけではなく、関谷委員のお話だと新しい形のコミュニティを作り上げるような守りだけでない果実を生み出していくようなものも含まれる。従来のコミュニティの解決というどうしても守り側なのですが、守りに入るものを守りに見せない工夫、その辺についてヒントをいただいたような気がしますが、その認識で間違いないでしょうか。

○関谷委員

間違いないと思います。コミュニティの再構築といった場合は正にそのとおりだと思います。

○鎌田座長

コミュニティというのは非常に分かりづらくて、昔、少しコミュニティの研究をしたことがありますが、

地域の現在の状況を表すことをコミュニティと言うし、将来の理想形を表すのもコミュニティと言い、二つの概念が混ざってしまっているのが、コミュニティの一番分かりにくいところだと習ったことがあります。そういう意味では、理想形としてのコミュニティを置いていく、そこは単純な課題解決ではなくて自己実現がされた形としてそれを目指すみたいな、そういう意味でコミュニティを捉えたと、課題解決がむしろその資源なり、個人の自己実現なりも入ってくるのではないのでしょうか。

話が余計に抽象的になっているかもしれませんが、その辺をライフステージの時間軸と、個人や組織等を含めた空間軸と、攻め・守りというのと、愛着・課題というのを2軸から3軸で組み合わせたら真ん中の部分が少し整理できるのではないかという気がしました。関谷委員、補足をお願いします。

○関谷委員

整理していただいたとおりでよいと思います。コミュニティというのは難しいですが、私なりのコミュニティのイメージは、重層的なもので、家族というのも一つのコミュニティですし、近隣コミュニティ、学区コミュニティ、事業者コミュニティ、行政コミュニティ、広域コミュニティなど色々な次元のコミュニティがあり得るので、立体的に考えていくべきものだと思います。そういうものをどういうふうに捉えていけばよいのか、再構築していけばよいのか。一つの理想的なコミュニティゾーンもありますし、地域の現場でいけば、このままじゃ自治会が持たないというような切実な問題に今直面しているわけですから、そういう中でこのコミュニティをどうしていこうか。熱心なところはもう少し横の連携に取り組んでいこう、自治会を強化していこうというような色々な動きが出てきていますが、いずれにしてもコミュニティの見直しとか、あるいは、どこに自分たちの軸を置くか、これまでは自治会に軸を置いてきたけれど、もうこれからはそれだと無理だから、例えば、学区単位のまちづくり協議会に軸を移すというような動きが関西の方ではたくさん出て来ています。どこに自分たちの軸足を置くのかということもそれぞれの自治体、地域によって見方が多様化してきているので、その辺も念頭に置いた概念図であるとよいかなと思います。

それと、連携をどうするかという点については、今の計画の中に補完性が記載されていますので、それをそのまま継承すればよいと思います。

コミュニティの立体的、重層的なイメージとライフステージ、それから空間軸・時間軸ということで整理でき、それと、上手に「協働」、「共創」の定義をかみ合わせられればよいと思います。

○事務局

イメージ図につきましては、もう一度整理して、委員の皆様に御相談させていただければと思います。

○鎌田座長

確かに、より詳しく描くとなると中心の見せ方ですね。

○事務局

今は単純に二つ並列という形にしていますが、そこをもう少し工夫したいと思います。

○鎌田座長

時間軸、空間軸があって、周辺に補完があるのか、中心にも補完があるのか。

○関谷委員

先ほど、現場の方でどういうふうに連携すればよいのか、何のために連携すればよいのかについて戸惑いが見られると申し上げましたが、イメージ図でいうと、正に色々な主体が連携していくことが大事であることまではどこでも言われています。

しかし、どう連携すればよいのか、何のために連携すればよいのかという部分が見えないというのが現場感覚だと思います。このため、私は先ほど、地域コミュニティの再構築や横断的な事業展開の二つの柱が大事ではないかと申し上げましたが、要するに、これはどういう連携としてつくりだしていくのかという実践の部分に関係してくるからです。

例えば、地域コミュニティだったら、こういった主体でもう一度コミュニティを再構築していきましょう、当然、地域活動の洗い出しをしましょう、洗い出しをしないとどこでどういう活動を行っているかすら知らないケースも結構あつたりしますので。あるいは、出来ていないことを話し合ひましょう、できていないことを出し合ったらコミュニティがこれから何をやらなければいけないのか、どういう連携が必要なのかということが見えてきますので、コミュニティをどうしようかということが連携を作っていく一つの大きな柱としてあります。

もう一つの横断的な事業展開は、これはエリアでまとまるというよりも、例えば、環境保全活動のため、こういうことに自分たちの町では取り組んでいこうという狼煙が上がって、そこでそれぞれの人たちができることを持ち寄って活動していくといった大きなプロジェクトが作られていく、そういう回路があると、連携はよく分からないけれど、皆が環境保全活動に取り組むのであれば面白そうということで新たな人が入って来る、そういうイメージがあると、多様な主体のイメージがもっと具体化すると思います。

そこら辺を上手につないであげると、現場からすれば何のための連携かといったときに、自分たちは何を基軸に考えているのか、コミュニティのことなのか、それとも面白そうなこと皆でやってみようという感覚なのかということ整理できるかと思います。

○鎌田座長

地域課題の色々な解決も含めて、その辺のことをイメージ図の新たな価値の創出の所に入れ込むことは違和感がありますでしょうか。高橋委員いかがでしょうか。現実は大変だということもありますが、関谷

委員がおっしゃるように、新たなコミュニティの創造のために活動していると置き換えるのは分かりづら
いでしょうか。

○高橋委員

町会も皆さん辞めてしまわれたり、それから町会そのものもなくなってしまったり、PTAも同じよう
に苦しんでいるところですが、現場の人間として、それをどうしてあげたらよいのかなというような、
ニュアンスが私は出てきてしまうので、先ほどもつついそちらの方面からの意見になってしまいました。

ただ、やはり、計画というものは、関谷委員のお話もそうですけれど、しっかりと作った上で今後どう
していくかということが非常に大事であると感じているところです。

○鎌田座長

一昨日、習志野市にある袖ヶ浦団地が今ちょうど夏祭りの時期で、その夏祭りの学生ボランティアのこ
とで、私は会議に参加してきました。従来、学生は、テントを張ったり、暑い中で焼きそばやフランクフ
ルトを作ったりと苦しい仕事ばかりだったのですが、今年は少し様子が変わってきていて、何が変わった
かという、御高齢の方の層の発言力が衰え、団地自治会にママさんが一人入ってきていました。ママさ
んが入ってくると、今までのように大学生に動員をかけて暑い中で焼きそばやフランクフルトを焼くとい
う流れが変わって、ママさんが学校つながりの友達をいっぱい呼んでくれたおかげで、ボランティアは余
っており、ママさんたちは楽しいことをどんどん発言されていました。

以前、そういう発言があっても必ず上から押さえられていたのですが、それを押さええているところの
パワーがなくなったため、ママさん世代の活動の仕分けがそのまま持ち込まれ、ボランティアの概念が
変わって、皆ボランティアに楽しんで参加していました。ボランティアの個なんですね。個人でやってき
て、個人の楽しみで参加し、それで、新たな繋がりが出てくる。子育てが終わったら次の世代が参加する。
ママさんだけでなく、元気なお年寄りも子どもを預けられたり大変ですが、孫を連れてくると、孫の
世代とお母さんがまた繋がり、新たなコミュニティができるというふうに、袖ヶ浦団地のコミュニティが
本当に関谷委員がおっしゃるように変化して、自ずと仕分けられてきていました。

そういった変化した体制の下では、学生は焼き鳥を焼かなくてもいいかもしれないし、もっと子どもと
遊んだりしてもいいかもしれない。その話と何か似ていませんか。影響力のある高齢者の方の発言権が
ある程度なくなったのが大きいですね。

○高橋委員

非常に大きいと思います。

○牧野委員

千葉市高齢福祉課が行っている「ちばし地域づくり大学校」は、現在5年目なのですが、NPOクラブが受託しております。絶賛受講生を募集中なのですが、今年から、町内自治会コースを作りました。静岡で実施していて、長く行っているので受講生は減少しているようですが、千葉市でも行ってみようと思い始めました。

初めてのコースなのでどうかとは思ったのですが、非常に人気があり、申し込んでくださる方々は、私たちが想像していたような頑固な方ではなく、ITもできるし、女性も多いし、50代で働きながら活動しているという方も多いです。だから、町内会・自治会といっても、もう様子は変わってきつつあるのがすごく手に取るように感じることができました。地縁とか地域の組織も元気をなくしていく高齢者というよりも、次の世代が主体的に取り組んでいけるように変わりつつあるというのは実感しています。

○鎌田座長

そういう意味で考えると、資料5のイメージ図について、目指すべきものが中心にあるということもありますが、中心が共通の認識で、取り組むべき成果だとすれば、中心に集まっている矢印が反対向きのケースもあり得るのでしょうか。それで、連携の手段が選択的に組まれていく、その辺について関谷委員いかがでしょうか。

○関谷委員

補完というのはそのイメージだと思います。

○鎌田座長

つながりもまた横に補完されていく。

○関谷委員

そのとおりです。

○牧野委員

全てに矢印を付ければよいのではないのでしょうか。

○高橋委員

そうだと思います。上も下も横も縦も矢印だらけにした方が面白いと思います。

○鎌田座長

事務局の方も分からないことがあれば、一人ずつ発言をお願いします。

○事務局

関谷委員は先ほど、資料5のイメージ図は協働を表している図のため、地域コミュニティの再構築や横

断的な事業展開を盛り込んだ方がよいのではないかとおっしゃっていましたが、一つの図で「協働」と「共創」をまとめて描くことはできるのでしょうか。それとも二つに図を分けて描くイメージでしょうか。

○関谷委員

どちらもあり得ると思います。真ん中の部分に実践というものを上手に強調して組み込む方法もあるし、「協働」の中から「共創」が作り出されるというように二段構えで示す方法もあり得ると思います。

○事務局

前回の計画策定時では、県としては、「県民活動」というのは地域の課題解決を図るものと整理していることを説明したと思いますが、この課題解決の中に、今おっしゃっていた地域コミュニティの再構築と横断的な事業展開があるという考えではないですね。

○関谷委員

そこはまたがるのではないのでしょうか。地域コミュニティの再構築と横断的な事業展開というものがあって、それぞれにその課題解決と魅力創出の両方があると思います。

○事務局

課題解決が上にあって、その中に地域コミュニティの再構築と横断的な事業展開が入っているイメージではないですね。

○関谷委員

コミュニティ実践とか横断的な実践等があって、その実践の中に課題解決の活動もあれば、魅力創出の活動もあるという理解です。

○事務局

これまでの話でいきますと、資料4の「共創」の定義では、①発展型、②創造型の二つに分けていますが、山本委員から御指摘いただいた地域課題の解決のための取組を契機とするかしないかという点については改めさせていただくというところと、切り口としては、関谷委員からお話いただいたとおり、課題解決型と魅力創出型、大きく分けるとこの二つという分類の仕方の方向でよろしいでしょうか。

○関谷委員

その方が分かりやすいというところはあります。新たな価値の創出は両方に入っているので、魅力創出系から新たな価値を作っていく場合もあれば、コミュニティから新たな価値を作っていく場合もあると思います。そういう概念的整理でよいと思います。

○鎌田座長

従来の課題解決型というのは、先ほど、関谷委員がおっしゃった守りの概念に近く、なかなか求心力を

得にくいと思いますが、そこら辺は矛盾をはらんでないんですかね。確かに、高橋委員のおっしゃるように、現実には本当は大変ということもあるのですが、一つの「共創」が目指す部分というのは、ある程度の共通の大まかな目標を見せていかないと、なかなか従来型の価値そのものを変えてもよいという方向に踏み込めないと思います。だから、①、②のうち、課題解決だけではなくて、個人の夢創造とか価値観の実現というものもここに入ると思います。

もともと、「共創」という言葉は、企業組織の中に個人とのコラボに取り組んでいこうというのがスタートなので、ここも個人というのは必ず出てくるはずですよ。そうすると、組織の実現と個人の自己実現の両方がある中で、課題解決というのは従来概念に当然縛られる可能性は高いわけです。そこは一緒によいのか、やはり並記をすべきなのか、その点については考えてもよいと思うのですがいかがでしょうか。

○関谷委員

私のイメージだと個人が入るのは「協働」の方です。例えば、既存の団体が個々であって、その団体が先ほどの年配の方の話もありましたけれど、すごく硬直的にあるから、新しい人がなかなか入りづらい。個人で入って、個人で化学反応を起こしてもよいというような発想が「協働」なのです。だから、そういう意味では、「協働」の部分に個人ということを確認しながら、個人として入っていて、色々な連携を作って橋渡しをしていく、新たな動きを作っていくという部分があって、そういう動きの中でコミュニティの再構築や横断的な事業展開をするといった実践につながったりするのだと思います。

○鎌田座長

成果の部分ではなく「協働」の部分に入っていくということですね。

○関谷委員

そのとおりです。

○事務局

今回、新たな取組ということで「ライフステージ」と「共創」について御意見をいただいているところですが、地域の課題解決が基本ということは大前提としてありますので、お話のありましたホップ・ステップ・ジャンプというところのホップの部分とか、ステップの部分、ここはしっかりと大事にしながら、さらに、ホップ・ステップ・ジャンプのところも今回目指していけたらと思っています。

○牧野委員

「共創」という概念を新しく取り入れているのですが、「協働」は「協働」であり、ホップ・ステップ・ジャンプが「共創」というとまた違う位置づけだから、ホップ・ステップ・ジャンプが「共創」ではなくて、新たに目の付け所として、この「共創」という言葉で表現をしていくということが必要だと

思います。それは「協働」だけでは表現できなかった新しい横断的な事業展開とか、地域コミュニティとか、新しい価値を作っていく資源を発掘しながら磨いていくとか、新しいものをこの場で示していくというふうにしていけばよいのではないのでしょうか。

「協働」を踏まえて「共創」みたいにするのは少し違うと思いますので、2つあるというふうにもう決めたらよいと思います。

○山本委員

新たな価値というのが、それを生み出さなければいけないプレッシャーというか、今でさえ大変なのにまた新しいものということに、違和感があつたのかもしれない。

そうすると、関谷委員がおっしゃった魅力創出とか、あと少し思ったのが、魅力の再発見などが良いように思いました。

今までの自分たちが取り組んできたことに自信を失くしているといいますか、何となく、今までできたことができなくなっているケースがあります。社会の流れとか、あと、新しい人が流入する地域はよいですけれど、どんどん人が出ていってしまう地域は本当に大変なので、今あるものにも十分魅力があるというところと、それをさらにどう持続するかというところがあるとよいと思ったので、魅力の創出だったり、再発見だったり「共創」の中に含まれるとよいのではと感じました。

○関谷委員

課題解決というとハードルが高いというふうに思われる傾向がありますよね。

○山本委員

そんな気がします。

私たちは認知症カフェというものの運営していたのですが、認知症に特化するというのが、そういう人を集めることなのかという話になった時に、そもそも私たちは障害のある人たちのことを知ってもらおうとか、とにかく誰でも来られるカフェにしようとして取り組んでいたところ、今まで地区社協の方とかも来てくださっていたのですが、さらに、介護福祉士の関係の在宅介護支援センター方たちや地域の人が来たり、隣の町会に御挨拶に行ったらその人たちが来たりしてくれました。実際、行っていた活動というのは、ちょっとしたゲームをしてみたり、それぞれ皆が楽しかったことや問題があったことについてお喋りおしゃべりしたりするのですが、直接地域の人と顔を合わせることで、本当に困りごとがあるのだったら、地区社協の方がつないでくれたりとか、そういう動きになっていくので、それは先ほどおっしゃっていた愛着とかの話につながるものだと思います。そういうところで、実は、課題解決につながるものが多いというか、課題解決につながるものが生まれてくると感じたので、地域課題だけではないワードを入れられる

とよいのかなと感じました。

○鎌田座長

ありがとうございます。事務局はいかがでしょうか。

○事務局

今回、次期計画の中で新しいワードとして「ライフステージに応じた」という言葉と、新たに「共創」という言葉を使わせていただきました。

当然、懇談会の委員の皆様にお示しする際には、県庁の幹部にも事前に説明していますが、色々な意見が幹部からもあり、今日を迎えたという形です。本日は骨子案ということでお示しをさせていただいています。様々な御意見をいただきましたので、少し整理させていただいて、また事前に委員の方々にもお示しをしながら、次期懇談会を迎えたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○鎌田座長

今日の懇談会は特に整理するものはないということでよろしかったですよね。本日の内容を事務局で整理させていただいて、次の懇談会でまた検討していきます。

○事務局

イメージ図については、今までのイメージ図は、正直私もわかりづらいと思ったため、皆さんの連携がよく分かる、また、県民の皆さんが見ても分かりやすいものということで、本日お示しをさせていただきました。

色々と御意見いただくのは承知の上で、お示しさせていただいておりますし、県の中でもこのイメージでよいのかという意見もありましたので、事務局の方で改めて整理させていただいて、お示しさせていただければと思います。

○鎌田座長

委員の方々も良いイメージがありましたら是非意見として出していただければと思います。橋爪委員いかがでしょうか。

○橋爪委員

「協働」と「共創」が似たようなものであって違うものなのかなということがあって、自分の頭の中でもまだ整理できておりません。新しいものを生み出すのは「協働」でもあったし、その違いがまだよく分かりません。

○鎌田座長

伊藤委員は初回の参加から話が難しくなって申し訳ありませんがいかがでしょうか。

○伊藤委員

分かりやすく話していただいてありがとうございました。

○鎌田座長

それでは、継続審議ということで、また、事務局の方で整理していただきたいと思います。それでは、最後、議事のその他があるということなので、事務局からお願いします。

議事（４）その他について

○事務局

私から１点追加で御説明させていただきます。

千葉県では、令和４年度から、民間の高度なスキルや人的ネットワーク等を有する方を副業人材として採用する取組を行っており、当課においても、昨年度に、県民活動推進コーディネーターの公募を実施したところ、１９２名の応募をいただき、県内市町村やＮＰＯ支援センターにおいて多数のコーディネート実績のある、影山さんに就任いただくこととなりましたのでここで御報告いたします。

今年度は、既に県民活動推進計画の改訂に係る助言や、各施策の実施に係る助言をいただいているほか、県内各市町村からの相談への対応等を行っていただいております。

引き続き、職員と活発に意見交換を行いながら、取組を進めてまいりたいと思います。

○鎌田座長

それでは、本日の議事は以上で終了となります。御協力ありがとうございました。進行を事務局にお返しします。

○事務局

鎌田座長はじめ、委員の皆様におかれましては、長時間にわたり活発に御議論いただくとともに、貴重な御意見を賜り、誠にありがとうございました。

頂戴した御意見は、今後の事業遂行及び計画策定に活かしてまいります。

次回の懇談会は、１０月頃、次期千葉県県民活動推進計画の素案についてご意見伺いたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、令和７年度第１回千葉県県民活動推進懇談会を終了します。本日はありがとうございました。